

泌 尿 器 科 紀 要

第 15 卷 第 11 号

1969年11月

随 想

副 腎

東北大学医学部病理学教室 笹 野 伸 昭

内分泌腺の機能を形態像の上から推定し、未知の分野へ踏み込むための足がかりとするなどとは、昔は全く夢物語にすぎなかった。それが、近年における検索方法の進歩と経験的事実の積み重ねによって、かなりのところまで可能となった。副腎皮質についてこの道を志すとき、その出発点は機能亢進症であり、その定型像における所見を基礎として、非定型や亜型の分析におよぶのが常道である。

病像の定型に対して、亜型や非定型の多いのは内分泌疾患の常であり、もちろん副腎皮質機能亢進症もその例外ではない。原発性アルドステロン症がはなばなしく登場して、皮質機能亢進症の中に加わったのはいまだ記憶のなまなましいところであるが、その後、進展整備されてきた知見の跡はなはだ合理的であり、それが他の型の副腎皮質機能亢進症についても近代内分泌学を背景とする再検討を呼びおこすに至った。その大部分が腺腫であることも、内分泌学的所見と形態との照合に幸いした。周知のように関心が定型から非定型、すなわち normokalemic primary aldosteronism に移るとともに、小さな腺腫の意義が注目されるようになった。これに対して、血清カリウムの低下を主徴とし、高血圧その他の症状を欠く型、すなわち normotensive primary aldosteronism (仮称) も確かに存在するようである。私どもがこれと推定した症例は、直径 1mm 余りの腺腫で、組織学的内容はアルドステロン症とみるにふさわしいものであった。

Cushing 病は古い革袋であるが、新しい酒は汲めどもつきない。その亜型としての acute Cushing disease が耳新しく聞こえたのもつかのまのことであって、大勢は ectopic ACTH syndrome の名に落着いたようである。その定型的なものは、下垂体からの分泌ではとうていおよびもつかないような膨大な量の ACTH 産生を伴い、臨床所見も、副腎所見も顕著であって、下垂体における Crooke 細胞の出現もみごとである。ところが、非定型の範囲は果てしない。腫瘍組織による ACTH 活性の assay がしだいに普及するにおよんで、ACTH 産生腫瘍でありながら臨床症例を欠く症例がクローズアップされてきた。

本来、Cushing 病の副腎には腫瘍よりも過形成が圧倒的に多いが、その程度にピンからキリまであり、肉眼的に皮質が全く正常の厚さで、組織学的所見に意味づけのむずかしいような症例もまれではない。まして肺癌その他の悪性腫瘍で臨床所見に異所性 ACTH 症

候を欠く場合は、腫瘍から多少の ACTH が産生されているにしても、副腎や下垂体の形態像に Cushing 特徴が明らかでないこともある。

副腎生殖器症候群は、古くから興味をもたれたにもかかわらず、内分泌学的には新しい分野である。本来、女性の男性化が最もポピュラーであるが、情（じょう）の深い女にかけて副腎 androgen と解くように、非定型のもでも女性の男性化症候が注目されている。これには本来、絶対数が女に多いということだけでなく、女性なればそこの種の変化が眼につきやすいことにもよるであろう。これに対して、男性の女性化、女性の女性化、はたまた男性の男性化には定型とともに非定型が当然存在するのであるが、生理的か病的かの区別がますます困難なことであろう。

副腎皮質に関する知見のうち、性ホルモンないし性機能に関連した領域には、未解決のところが多く、これから大いに開拓のぞまれるところである。最近、アナボリック・ステロイドについて、薬理学的効果を基礎とする代謝への影響が注目されているが、主題は蛋白質代謝からコレステロール代謝へと発展している。副腎皮質に関する形態像の分析についても、従来のようにストレス一般に対する反応像だけでなく、代謝性変化に応じた所見についても、皮質内層とともにもっと注目されるべきである。

広島大学の仁平寛己教授が山口におられた当時、意気投合して系統的に副腎バイオプシーをやっていた。腎付近の手術的操作を予定された患者について、あらかじめ一定の生化学的および内分泌学的検査をほどこし、手術時にその側の副腎の一端を切除して組織学的に検索するのである。その結果、高血圧患者にみられるそれ相当の変化や、腎盂腎炎や腎石の患者における慢性の副腎炎ないし副腎周囲炎などは、当然のこととして予測どおりである。興味のもたれたのは、長期にわたり蛋白尿が持続したり、腎機能の低下のつづいている慢性腎疾患の患者で、網状帯を中心とする皮質内層における細胞の肥大や増生といった変化である。このような場合に睾丸バイオプシーを行なうと、しばしば造精機能の低下と、Leydig 細胞の活動性の所見をみる。これらはすべて、きわめて理の当然の結果であろうが、改めて認識を深くした所見である。

副腎皮質はきわめて鋭敏な臓器であり、その細胞形態が個体の動きをよく反映する。その反面、剖検例ではいかに死後変化の乏しい症例であっても、死をもたらした直接の動機による変化がしばしば強く、またそこまでに至る背景の変化も複雑である。したがって、副腎所見を病歴と照合して読むことには、しばしば困難を感ずる。それゆえに、副腎バイオプシーがもっと普及すれば、副腎における形態と機能との相関の解析に寄与するばかりでなく、臨床検査の生化学的データに至った過程、あるいはその数字に現われないところの生体の動きを知るに便であろう。組織標本によって副腎所見を読むことにはかなりの修練を要するが、慣れれば楽しいものである。これが皆にもっと親しまれるようになることを祈念してやまない。